佳作

生まれかわり

千葉県　館山市立館山小学校五年　井田　澄人

夏の暑い日の夕方、お父さんから家族のグループラインに写真が送られてきた。家のドアの前に猫が写っていた。ぼくはスイミングの帰りで「すぐに帰るからそのままにしておいて！」と返信し、お母さんに、

「車のスピードを上げて！」

とたのんだ。

家に着くと、ニャーニャー言いながら足にすり寄ってくる猫がいた。ぼくは動物が大好きだから

「飼いたい！」

と言ったけど、家には十八才のおじいちゃん犬もいるし、この猫は人なつっこいから、きっとだれかの飼い猫だろうとお母さんに言われて、その日はバイバイした。ぼくはその日の夜、こっそり家の周りを探したけど、もういなかった。

次の日の夕方、またその猫が現れた。今度は家の近くの神社の前。車にひかれるのが心配だったので、お母さんにたのんで保護することにした。お母さんはじゅう医さんに電話して、おじいちゃん犬のちょこたと一緒にすむのは大丈夫か確認してくれた。大丈夫だと言われてホッとした。じゅう医さんはノミの薬だけ持ってきてくれた。

迷い猫を探している家族がいるかもしれないので、警察や保健所に行ったりして飼い主を探した。そして、三ヶ月間この猫を預かることになった。猫はマイコと呼ぶことにした。ちょこたはもう目が見えないくらいおじいちゃんだったから、マイコの存在に気づいているかはわからなかった。けれど、怒ってほえることもなく、クンクンにおいだけをかいでいた。マイコはとても甘え上手で、ごはんもたくさん食べるし、自分の家のように過ごしていた。ちょこたに妹ができたみたいで、うれしかった。

マイコが家にやってきて、三週間くらい経った朝、ちょこたが死んだ。前の日はいつも通りだったのに。ぼくは泣いた。すごく泣いた。でも、となりにマイコがいた。いつもみたいに甘えてくるから、マイコをなでた。とても悲しいはずなのに、涙が止まって、マイコがいてくれて良かったと思った。

何日かすぎて、ちょこたの部屋には何もなくなった。心にぽっかり穴があいたみたいだ。

「ニャー。」

とマイコがなく。さわってほしいのか、ご飯がほしいのか、外が見たいのかのどれかだ。お母さんがマイコをさわりながら、

「もしかしたら、ちょこたはもうすぐ死んじゃう気がするから、みんながさみしくないようにマイコをよんでくれたのかもね？」

って言った。ぼくは、

「そんなわけないじゃん。」

って言ったけど、実は「生まれかわり」なのかも、と少し思った。

あれから一年たった。マイコはぼくの家族になった。これからも一緒にいようね。